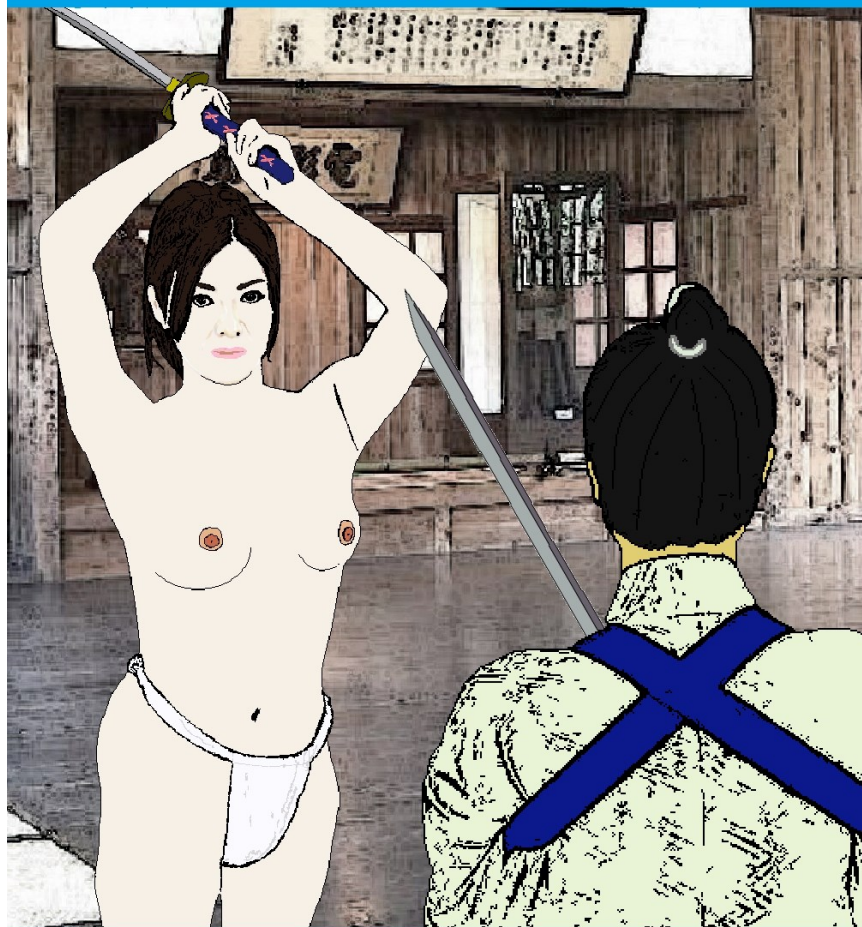


悲剣肌風 継承編

死中に愛を求む女人剣



濠門長恭 著

卷之三

登場人物

神崎正恵

正安と弥恵のひとり娘。秘剣を継承したいと熱望するが、稽古で覚えられる剣ではなく、ひとり工夫を凝らす。

神崎弥恵

神崎古流の達者。正安の妻、正恵の母。仇討の場で秘剣肌風を（偶然に）繰り出し、後日に返り仇討を退けたとき、その本質を知る。と同時に、秘剣を封印する。

神崎正安

武術百般・神崎古流六代目師匠。女人を緊縛し剃毛せねば男になれぬ因業を背負っている。

柴田珠代

柴田七郎の娘。四つ上の正恵に憧れとも淡い恋ともつかぬ思いを抱いている。

柴田七郎

弥恵の弟。増沢煙草を仕切る郡の代官に抜擢される。

坂倉志郎左

神崎古流の一番札。七代目とも正恵の婿とも目されている。

糸

増沢煙草の秘密を盗み出そうとして捕まった女間者。

注記

本作品は『悲剣肌風（卷之二）発動編』『悲剣肌風（卷之二）模索編』の続編です。本編だけで完結していますが、前作を併せてお読みくだされば、いっそうお楽しみいただけると思います。

目次

一． 繩合歡	四
二． 郡代官	十九
三． 電光組	四十
四． 百合抄	
五． 煙草毒	
六． 女百敲	
七． 逆肌風	
後書き	

一・縄合歓

田圃の合間に藁葺きの農家が点在する中に、瓦葺きの大きな家がある。門を構えて『諸武術・神崎古流』の看板が掲げられている。神崎正安が弥恵を娶った翌年に、それまでの道場から二町ほどはなれた場所に移った新道場だった。新とはいっても、すでに二十年ちかい歳月を経ている。

以前は古参と新参とを午前と午後とに分けていたが、道場が広くなってからはすべて午前稽古になった。いや、すべてではない。五十ごとの日には、多いときで十人ほどの娘がおもに薙刀や懐剣術を習いに午後から訪れる。八つの鐘（午後二時頃）から七つの鐘までの短い間だから、なにほどの稽古にもならない。熱心な者は定め日の他にもかよってくるし、午前の稽古につらなる猛者も正恵の他にいないでもない。

しかし今日の道場はひっそり閑としている。どころか、雨戸まで立てていた。明り取りの窓だけは開かれており、じゅうぶん明るいう道場の中で、正安と弥恵とが型稽古をしている。あらかじめ攻防の手順が決められているとはいえ、ふたりが手にしているのは真剣だった。しかも神崎古流の型稽古は千変万化。仕太刀が定まらなければ、受け太刀はただちに攻勢に転じる。一瞬の油断が大怪我につながりかねない。

「鋭っ！」

「応っ！」

気合声とともに白刃がぶつかり、火花が散る。夏の午後に締め切った道場の中で激しい動きを半時（一時間）ちかく続けているというのに、ふたりとも薄く汗をかいているだけなのは、それだけ身体を鍛えている証であり、動きに無駄がないからだった。

弥恵、●十五歳。この当時なら大年増と呼ばれてもおかしくないのだが、引き締まった

体軀にうつすらと脂が乗った様は、まさに女盛りといえた。汗の匂いさえも艶めかしい。

神崎正安、七十五歳。弥恵を娶った十八年前に比べて、総髪はすっかり白くなったが、五尺四寸を鎧う筋肉に衰えは無い。盛りをとつくに過ぎてはいても、まだまだ男であり牙を失ってはいなかった。

「達っ！」

ひときわ鋭い気合声で撃ち込んだ正安は、受け太刀をさらに押し込み、足を掛けて弥恵を転ばせた。型にはない不合理な動きだった。脚を掛ける動作で正安の身体は不安定となり、反撃されればかわす余地がない。

しかし弥恵は相手の隙をつくことなく床に転がった。自傷せぬよう刀を放ったのだから、不意打ちを食らったのでもない。

正安は無言で馬乗りになり、ぐいと弥恵の襟を広げた。張りのある乳房が転び出る。襟首をつかんで着物を引き剥すと、弥恵をうつ伏せにして片膝で腰骨のあたりを押さえる。

腰に提げた棒縄を手早くほどくと、弥恵の首を背中にねじ上げて縛った。

正安の膝が腰からはなれても、弥恵は逃れようとしなない。どころか、稽古袴を脱がされるときは、わずかに尻を浮かして正安を助けた。

正安は妻の足首を重ねて十文字に縛り、縄尻を後ろ手につないだ。そのまま、あお向けに据えなおす。必然、弥恵は脚を開いて無毛の股間を高く突き上げた形になる。ただに女の抵抗を封じるといふ以上に、弥恵を相手に正安の嗜癖は昂進したようである。

ふたりとも無言。息だけが熱く荒い。

正安の視線に股間を灼かれて、弥恵の裸身が濃い桜色に染まる。正安にはじめて縛られて貫かれた昔に比べて倍以上に膨らんだ乳房は、赤子に吸わせたとは思えぬほどに若々しかった。今日は格別として、いつでも道場に上げられるように昼間は晒し布で胸を守ってきた、その積み重ねもあつただろうか。

その豊満な乳房を揉まれ、これは経産婦であることを物語る葡萄のような乳首を転がされて。

「あ、は……んん」

吐息が弥恵の唇からこぼれる。正安が見つめるうちにも、秘門が濡れそぼっていく。そこへ正安の指が触れた。

「ああっ……」

気合声とはまったく異なる音色が道場に響きわたる。しかし、それを聞く者はふたりのほかになかった。下働きは使っていないし、ひとり娘の正恵は月に二度の恒例で、弥恵の弟である柴田七郎の家へ泊りがけで習い事に行っていた。

正恵も珠代も同じ師匠について茶と華を習っている。正恵は道場での稽古を終えてから家を出るので、明るいうちに帰るとなると、ごく短い時間しか教授を受けられない。だから茶も華も月に一度ずつは夕暮れまで教わって、そのまま柴田家に泊めてもらうのだった。

「あなた……お願い。もう……」

弥恵が縄の許す限りに腰を揺すって、切羽詰まった喘ぎを漏らした。

正恵が戻って二日後の水無月（旧暦六月）

十日。道場には七郎の娘である珠代の姿があった。一番の下座に控えて、目は、男たちに交じって稽古をする正恵の姿を追っていた。

珠代は娘弟子のうちでは熱心な部類にはいる——というわけでもない。四歳違いの正恵になつていて、五十ごの日には朝から押し掛けて来るのだった。華と茶を泊りがけで習いに来るよう正恵に勧めたのも珠代だった。そして、正恵が泊まるのと同じ回数だけ、自分もちゃっかり道場に泊まって帰るのだった。

ばしん。正恵が相手の竹刀を跳ね上げて、返す刀で面を打った。

「参った」

相手は竹刀を引いて一礼した。神崎古流では、今も頑として防具は身に着けない。その

素面を打たれてけろりとしているのだから、正恵の打撃はごく軽いものだった。寸止めをしくじったといったほうが事実にかしい。

『跳ね返し面』。面を狙ってくる相手の斬撃を刀身ですり上げて逸らすだけでは、あるいは腕を斬られるかもしれない。じゅうぶんの力で刀を弾き飛ばすのが、この技の第一義である。自分の刀も当然に身体からはなれるから、返す刀で正確に面を打つには相当の技量が要る。十五番札を相手に、正恵にはそれだけの余裕があった。しかし、竹刀を紙一重で止めるだけの余裕ではなかった。

●八歳の正恵は、すでに神崎道場の三番札を張っている。父母の血を引いて天稟に恵まれたうえに、幼い頃から正安に仕込まれてきたのだから、十歳で入門して十五、六の頃から本気になった連中よりは年季も積んでいる。

とはいえ、正恵が三番札でいられるのには、ほかの門人たちの遠慮もはたらいていた。それは……

「それまで。稽古を終える」

一段高い見所から正安が呼ばわった。

「本日の打ち上げ仕合は、坂倉と……」

「ぜひ、わたしに」

名乗りをあげたのは正恵だった。

稽古の締めくくりは高位者同士の仕合というのが、ここ数年の習わしになっていた。正安が一番札の坂倉志郎左を指名したのは当然だが。

正安はかすかに苦笑したふうだった。が、この五日ほどは正恵に声を掛けていないのだから、とつくに出番ではある。

「よかろう。坂倉と正恵にする」

正恵は迷うことなく定寸の竹刀を左手に提げて進み出た。正恵は母と違って、小太刀よりは定寸を得手としている。ちなみに竹刀の定寸とは、刀身の二尺五寸に柄の七寸を足した三尺二寸。現代の竹刀では三尺八寸だが、鰐から先の刀身はほぼ同じ長さ。六寸の差は、柄を握る籠手と素手との幅の差である。

志郎左と弥恵とは並んで正安に向かい、一礼の後、三間（約五メートル）を隔てて向かい合った。

両者は左手を鯉口にして竹刀を抜き、ともに正眼につけた。

するすると志郎左が足を運んで間合いを詰めながら、上段に振りかぶる。

「……」

正恵は相手の左小手に隙を見出したが、敢えて撃ち込もうとはしなかった。その隙は誘いではない。けれど、左小手を打ったところで、まだ右手が残っている。片手で撃ち込まれる斬撃をかわせるかどうか。いや、体当たりでも食らわされたら、自分よりも五割は重い志郎左に押し倒されてしまう。

常に実戦を想定する神崎古流の仕合では、相手の息の根を止められるかどうか、勝敗の分かれ目になるのだった。

「やああっ……！」

正恵は右足を大きく踏み込んだ。志郎左が

上段につける寸前を狙つての面撃ちだ。

志郎左はわずかに身体をひねって太刀筋をかわしながら、上げかけていた竹刀を瞬時に返し、正恵の斬撃をうわまわる速さで振り下ろして小手を打ちにいく。『かぶせ小手』。将軍家御留流として人口に膾炙した柳生新陰流でいうところの『合撃打ち』。真剣ならば手首か小手を切断して、相手を戦闘不能にする。

志郎左の竹刀に軽く両手首を打たれて、正恵は自分の竹刀を引きかけた。またしても及ばなかったと、悔しい思いを噛み締めながら負けを認めかけた。そのとき。珠代の顔がちらっと眼の隅にはいった。食い入るように勝負を見つめているその表情に落胆を読み取ったのは、正恵の思い過ぎだったろう。

「まだじゃ！」

正恵は竹刀を我から捨てた。そして、踏み込んだままになっている右足に体重を乗せて、肩から志郎左にぶつかっていった。

「おっ……」

志郎左は正恵の突進をかわそうとはせずに胸板で受けた。受け止めかねて、両者は折り重なって倒れる。

「ええいっ！」

正恵の肘（手は切断されているから使えない）が志郎左の喉元に食い込んだ。

「参った」

志郎左が四肢を投げ出して降参する。

「それまで」

勝負の決着を告げる正安の声には、溜め息が雑ざっていた。

正恵が、組み敷いていた志郎左から身をはなして立ち上がる。志郎左も立って正恵の横に並んだ。互いに礼を交わして、正安に向きなおって一礼しながら。正恵は唇を噛み締めていた。

手首への打撃が軽かったのは、掛かり稽古で正恵が相手の面を打った（打ってしまった）のと同じ理屈だ。そこに稽古のうえでの配慮はあっても遠慮はない。しかし、体当たりを

まともに受け止めたのは志郎左の優しさであり、反撃しなかったのは女人への遠慮だったと、正恵がいちばんによくわかっている。それが悔しかった。

余の門人たちにも、似たような遠慮はある。けれど志郎左のそれが、いちばん悔しかった。

坂倉志郎左の実力は際立っている。二番札と三番札との差異の比ではない。神崎古流の七代目を嗣ぐのは彼に相違ないと、衆目の一致するところである。

もし志郎左が道場を嗣ぐとなると、正安には娘がいるのだからして、婿養子という話になってくる。なってくるものにも、すでに昨年の秋、正恵は母から打診されていた。

志郎左にさしたる欠点はない。強いていえば、いささか優柔不断なところがあり、他人の言葉に惑わされる面が見受けられる。とはいえ、武術での勝負どころを過たぬ決断を見れば、慎重熟慮というべきだろう。聞く耳持たぬ猪突猛進よりは、はるかに好ましい。

しかし正恵は、志郎左の妻になった自分の姿を想像できない。それは無論、神崎正安のことである。どうしても厭と突っぱねれば、武術の道統と神崎家とは別ものと諦めてくれるだろうが。しかし、どうしても厭というわけでもないから、正恵自身、かえって始末に困っている。

負けっぱなしのままで婿に迎えるのは、一矢も報いることなく開城するようなものだ。けれど、自分より弱い男の妻になる気など、さらさらない。四分六、せめて三本か四本に一本くらいが理想なのだろうが、そうそう正恵の思いどおりになるはずもなかった。

城勤の志郎左が道場で稽古するのは一日おき。正恵は毎日。それなのに、実力の差は縮まるどころか、むしろ開いていくように感じている。

それも道理で。志郎左は寅の一点（午前四時半頃）には起床して、すくなくとも一刻は

ひとり稽古をしている。夜も存分に身体を苛めてから、泥のように眠る。

そのひとり稽古を終えて五つ半に登城するなり、志郎左は上役の亀井利政に別室へ呼ばれた。

「つなぎは、つくだろうな？」

「はい。出入の八百屋に頼めば、遅くとも四日後には」

雑貨の行商を営んでいる八百屋の弟が村に着く。

「では——予定を早めて今月中にと、伝えてくれ」

「それは、また急な……？」

「差配が替わる。なんと、柴田殿だ。あの方は男の顔を見知っておるやもしれぬ」

志郎左は、すぐに返事をしなかった。郡代官が替われれば、当然に任地の巡察を行なう。

しかし前触れがあるのだから、そのときに顔を出さなければすむ話だ。だいいち、城下を除く藩の四半分を治める代官が、前任地の百

姓の顔をいちいち覚えているだろうか。

「万一にもしくじってはならぬ。用心に越したことはない」

だからこそ、入念な手筈を調えたのだ。それを杞憂で覆してよいものだろうか——そうは思うのだが、志郎左は逆らえなかった。亀井利政の父親が農事方の頂点に立つ亀井直元だからではない。妹の嫁入りの持参金にでもと渡された十両が、彼を縛っていた。

「では、そのように手配いたします」

答えて。急用を言いつかつた態度で、志郎左はすぐに下城した。

二・郡代官

山腹を一段一段と這い登る棚田が尽きて斜面がきつくなると、そこからしばらくは胸の高さほどの草が生い茂る畑になっていた。籠を背負った女たちが、葉の一枚ずつを吟味しては、ほどよく成熟したものだけを摘み取っている。増沢藩の財政を支える煙草の収穫風景だった。

山道を行く侍の一行に気づくと女たちは驚いた顔になった。抜き打ちの巡察だからだ。あわてた態で頭を下げるが、すぐ仕事に戻る。働いている者の手を止めさせるなど、もつてのほか——という気風が、増沢藩には行きわたっている。

「米のほうは虫害で昨年の三割減になりそうだとのことですが、こちらは無事安泰のよう
で、喜ばしいかぎりです」

同心の久保彦太郎がおもねるような顔を向

けた先は郡代官の野々村為永ではなく、月が明ければお役目を退く野々村に替わる柴田七郎だった。

「うむ……」

しかし安心は早い。煙草は米と違って、収穫してからあとの作業が品の良し悪しを決める。適度に乾燥させてから葉の筋を取り除き、小分けの樽に詰めて蔵の中で熟成させ、火付きが良くてもしかもすぐには燃え尽きない大きさに刻み、上葉から下葉まで味も火持ちも異なるものを混ぜ合わせて等級別の刻み煙草に仕上げねばならない。さらに増沢煙草はさまざまな薬草を混ぜて独特の風味を出すのだが、特撰品から下級品まで配合は違う。これは庄屋を兼ねる刻み小屋頭の秘伝だった。

柴田七郎勝則。姉とともに見事親の仇を討ち、帰参して若殿付の小姓に取り立てられたものの、重ね仇討（仇を討たれた側の報復）を藩の許可なく迎え撃ち、やむを得ぬ仕儀で立会人を務めた小島要介を巻き添えにして落

命させた咎により、農事方へ左遷せらる。というのが、小島政衛門父子の画策による七郎襲撃事件の表向きの決着だった。

藩としても、作事方家老が他国の商人から御禁制の品を賄賂に受けていたとは公にできない。しかも、それを糾弾せんとした農事方家老を暗殺したなどと公儀に知られては十中十まで、増沢藩は取り潰される。腹を切らせろわけにもいかず、表向きの名目は息子の軽挙を看過した家内取締不行届とされて、小島政衛門は御役御免になり、五百石のうち職禄の四百石は返上。百石の家禄も半減のうえ閉門となった。そのまま赦されることなく六年後に病没。次男への相続は認められず、小島家は絶えた。

小島政衛門に取り入って新規に煙草株座に加わった他国の商人たちは、別に口実を設けて身代お構いなしの所払い。財産ともども自国へ引き揚げることを許された。

七郎については。若殿の側近から地回りへ

の降格は、厳しい処分に見える。しかし、農事方で経験と知識とを積んで順当に役職を登ってゆけば。斬殺された柴田弥一郎に替わって任用された立花尚勝は、当時すでに老齡。

五年後の農事方奉行は亀井直元と目されているが、その後を襲う目はおおいにある——と、そう見る向きも少なくなかった。見事仇討の本懐を遂げたばかりか、重ね仇討をも退けた七郎には縁談がつぎつぎと持ち込まれた。当時でも男としては早婚の年齢で妻を迎えたのも、むべなるかなであった。

大方の予想を裏切ることなく、すでに三年前、七郎は異例の若さで中埜郡の郡代官に抜擢されていた。そして今回の異動先は、増沢藩の金蔵に直結する煙草の主産地、西脇郡である。他所の郡代官とは重みが違った。

出世につれて禄高も増えている。小姓に取り立てられたときは、すでに百石の家禄があるので他の者との釣り合いもあり、五人扶持をいただいたのだが、小島政衛門が家禄を

半減されたときにも、喧嘩両成敗の常識に反して柴田家は減封されなかった。郡代官所の筆頭に昇ったときには三十石の職禄を加えられ、西脇郡代官所に任ぜられて百石となった。

家禄と職禄とを合わせて合わせて二百石は、五万石の小藩では上級藩士に数えられる。

「それにしても、山道はこたえます」

もうひとりの同心が、肉置きを持って余したように汗を拭いながらぼやいた。

「あ、いや……このような土地でなければ煙草の植え付けがかなわぬことは、よつくわきまえております」

幕藩体制の礎は米作である。何万石というふうに国力を表わすのであるから、換金作物の栽培を幕府は（すくなくとも表向きは）奨励していない。水田をつぶすなど、もつてのほか。いきおい、騎馬での見回りが難渋するような地で隠れるようにして煙草を栽培することになる。

郡代官ともあろう者が、徒歩かちでの見回りだ

った。見回りというよりは、前任者から後任者への引継ぎのための実地検分である。付き従う部下は同心が二人に、荷物持ちを兼ねた手代が三人。さらに、野々村と七郎の小者が一人ずつ。正式の巡視でなくても、それなりの陣容になってしまう。

煙草畑はすぐに終わって、そこから先は人の背丈の倍ほどもある草が生い茂っていた。

「ご存知かしらぬが、これも増沢煙草の畑。煙草に混ぜる薬草です。刻み屋敷に着いてから、あらためて説明いたす」

野々村が指さした先、山道の向こうに大きな瓦葺きの屋根が見えていた。恰好の焚付けになる乾燥した葉煙草を扱うのだから、燃えやすい藁葺き屋根は避けている。

野々村は七郎ほどには身体を鍛えていない。五十四歳と、当時では定年を過ぎた年齢である。いささか頼りない足取りで、ゆっくりと山道を登っている。

「……む？」

一瞬、七郎の足が止まった。が、他の者に
は女のかすかな悲鳴が聞こえなかったようだ
と察すると、歩度を速めて歩き出した。

「ちと確かめたいことがありますので、お先
に行かせていただきます」

野々村を追い越して、ずんずんと先へ進む。
後を追うのは、七郎の小者ひとり。

「ひいいっ……天神峠を越えたら方角を変え
て御城下に向かうつもりだった。本当です。

何遍言ったら信じてくれるんですか」

「嘘をつくな。国から逃げ出すやつが、御城
下へなんか行くはずがねえ」

女の悲鳴と男の怒声。そこへ肉を打つ鈍い
音が重なる。

山の七合目あたりに開けた小さな平地。庄
屋を兼ねる刻み小屋当主の屋敷が、三つの小
屋を従えて建っている。いちばん大きな小屋
は屋敷と同じ瓦葺きで、これが刻み小屋だっ
た。そのかたわらに立つ松の樹に素裸の若い
女が吊るされており、これを三人の男が取り

囲んでいた。両側の男は縄束を手に、女を打ち据えている。

「なにをしておる!？」

七郎が大声で呼ばわると、三人がぎくつと振り返った。女も不安そうに顔を上げた。

「これは、どういう次第なのだ？」

女は二十を越えたか越えないか。引き締まった体躯は野良仕事で鍛えられたものだろうが、それにしても肌が白い。その白い裸身に、細身のわりには豊かな乳房にまで、赤い筋が幾重にも刻まれている。

「われは、来月よりこの地を預かる郡代官となる柴田七郎勝則である。この狼藉は、如何なることだ」

女の正面に立っている男だけは責め道具を持たず、着物が筒袖でなく袂があり、野袴も着けている。その男に、七郎が詰め寄った。

「お見苦しいところをお見せして申し訳ありません。わたくし、村を預かっております麻田太兵衛にございます。いえ、もうあらかた

の始末は終わったのでございますが……」

村の不始末を見咎められた後ろめたさ故か、太兵衛の物言いはひどく丁寧でまわりくどかった。それを要約すると。

去年の秋、この女は父親とともに隣藩から逃げて、遠縁の者を頼って村へたどり着いた。しかし、父娘の探す人物は村におらず、かといつて他に頼る先もなく、ここに居ついた。娘の名は糸、父親は重蔵へいざうという。国境となつてゐる深い沢を越えて来たというので、沢渡の二つ名がついた。

と、ここまではどうということもないのだが、娘が太兵衛の息子である長太郎と恋仲になつてしまった。

農民とはいえ、苗字帯刀を許された麻田の家には、それなりの格式がある。さらに、麻田家の嫁は村の中か、せいぜいは近在から求めるという習わしもあつた。許されぬ恋。糸は欠け落ちをせがんだが、さすがに長太郎は肯んじぬ。ついに糸は諦め、姿を消した――

父の重蔵とともに。

そうして村には、錠前を壊された種小屋が残った。煙草に混ぜる葉草の種子が少量だが盗まれていた。ただちに追手がかけられたの
は言うまでもない。

そうして、糸はその日のうちに捕らえられた。沢渡の異名に似つかわしくもなく足を滑らせて崖から落ち、歩けぬほどに足をくじいたのだ。薄情にも、父親はひとりで逃げ落ちていた。

「この女が息子に近づいたのも、はなから種が目当てだったに違いないです」

女はうなだれたまま、太兵衛の言葉をあえて否定しようとはしなかった。くじいた左足をかばって右足一本で立ち、体重の半ばを吊るされた腕にあずけてうなだれている。

「葉草の種と申したな。あの葉草か？」

七郎に追いついて太兵衛の説明を途中から聞いていた野々村が、声をひそめて訊ねた。

「はい。これでございます」

太兵衛が袂から取り出した紙包みを開くと、茶色のいびつな丸薬のような物が三、四十ほどもあった。

「うむ……」

野々村は同心たちに庭の外で待てと命じた。「それから、これとこれも」

はなれて様子を見守る役人たちに隠すようにして、太兵衛はさらに二つの紙包みを取り出した。どちらにも同じような種が包まれていたが、ひとつは先に見せられたものに比べて角張っており、ひとつは黄色味を帯びている。

「雄株と雌株の種か？」

「はい。しかも……おい、茂平」

太兵衛は女を叩いていた男のひとりに命じて、丸めた布を持ってこさせた。女から剥ぎ取った腰巻だった。七郎たちの目の前で開かれたそれには、飴色がかった白い物が二つくるまれていた。ひとつは長さ三寸、太さ一寸半ほどの卵形。もうひとつも長さは同じくら

いだが、ずっと細い。どちらも、一端から短い紐が垂れている。蠟燭と言われれば納得してしまいそうだった。

「これを女陰ほとと、その……後ろの穴にも隠しておりました。ご覧ください」

太兵衛が卵形のほうを両手で持つて親指に力をいれると、蠟が縦に割れた。中には雄株と雌株の種子が分けて埋め込まれていた。細い方には、野々村が言うところの、あの葉草の種。

「このような真似が、並みの女に出来るとも思えませんです。こいつ、煙草の秘密を盗みに来た回し者だと目星を付けております」

これはまた、大仰な——と苦笑しかけた七郎だが、たしかに、秘所に隠した蠟型とは尋常ではない。さはあれど、秘密とはどういう意味か。増沢煙草には何種類もの葉草が混ぜられている。種子の一種類ではなく、その配合こそが秘密なのではないか。

「柴田殿、耳をお貸し願いたい」

七郎の腑に落ちぬ表情に気づいてか、野々村が顔を寄せてきた。しかし、太兵衛たちを遠ざけようとはしない。

「すでにご存じかも知れぬが、この種こそが増沢煙草を増沢煙草たらしめているのです」

野々村の説明によると。

女が隠し持っていたのは大麻の種子であるが、その花穂には特殊な薬効がある。そのまま刻んで吸うと、この世が極楽浄土のように感じられるという。陽の光は虹色に彩られ、風のそよぎも妙なる調べに聞こえる。吸った当人の心は氣宇壮大に開かれて、失意のどん底に沈んでいた者も天馬の氣概を得る。

「それでは、まるで阿芙蓉（アヘン）ではありませんか」

「そうではない」

野々村は断言して、声の大きかったことに気づいて、遠ざけている部下を振り返った。

「身体に害は及ぼさぬし、ごく少量しか混ぜぬ」

特撰の鶴翼と、昔からあつた松風・笹音・梅花。その四種の煙草のうち、もつとも花穂の配合が多い特撰でも、酒でいえばほろ酔いくらいに抑えてあるという。

「柴田殿は父御から聞かされておらぬのか？」

野々村が怪訝な顔をしたのも道理。もともと微量の薬草を配合していた増沢煙草に大麻の花穂を加える工夫は、先代の麻田家当主の進言を、郡代官所同心だった柴田弥一郎が取り上げたことに端を発する。初めは特撰品を新たに作ってそれだけに配合し、評判になるにつれて下級品へも行きわたらせながら、売値も上げていった。利払いもままならず膨らみつづけていた藩の借金が、少しずつながら減りはじめた。その功績で弥一郎は若くして郡代官に任ぜられ、のちに農事方家老まで出世したのだった。

政り事のあれこれを子供たちに語り聞かせた弥一郎だったが、これだけは藩の秘事とし

て黙していたのだろう。今でも、これを知る立場にあるのは藩主と三人の家老、そして当地の郡代官だけということになっている。七郎も噂としては耳にしたこともあるが、花穂の強い薬効までは知らなかった。

増沢煙草には阿芙蓉の如き害毒は無いと、野々村は重ねて言った。花穂ばかりを大量に吸いつづければ、あるいは何ほどの害もあろう。しかし、それは増沢煙草にかぎったことではない。煙草そのものに害毒があるという医者もいるし、極論をすれば、塩や醤油でも大量に食せば死を招く。適量の塩を用いれば天下の美味になると同じで、少量の花穂を混じた増沢煙草は天下の名品なのだ。

話を戻せば。太兵衛は、そして野々村も、三種の種子が盗まれたことを重く見ている。

強い薬効を持つ大麻から採った種子を撒いても、実は同じ株は生えない。角張った種子の雄株と黄色味がかった種子の雌株とを掛け合わせねばならない。現代でいう一代雑種であ

る。限られた時期に掛け合わせるとともに、それぞれの元種も残さねばならない。その技術を持つのは太兵衛と息子だけであるが、聞きかじりで真似て成功しないともかぎらない。

「この女。いずこの手の者か……」

痣だらけの裸身を野々村がねめつけた。

細々と煙草作りをつづけている咲川藩あたりが送り込んだ密偵なら、まだしも。公儀の息が掛かっていると厄介なことになりかねない。

いや、逆かもしれない。幕府にも、畏くも宮中にも、増沢煙草の特撰品を年ごとに献上している。お抱えの医師や薬草方の吟味を経て差し許されたのであるから、お墨付きをいただいているも同然だ。他藩で栽培されて増沢煙草の牙城を崩されるほうが始末に悪いのではないか。

「誰かに言われて盗んだものではありません」

女が顔を上げて、はじめて声を発した。あまりにきつぱりとした口調だった。

「村から逃げたら、食うに困ります。菓草の種なら高く売れるし、おあしを盗むよりは迷惑をかけないと思つたんです」

女の浅知恵——では、蟬型を説明できない。やはりこの女は素破のたぐいだらうと、七郎も思いなおしていた。

「このうえは、いくら責めても無駄でしょう」七郎の言葉は、痛めつけられた女への憐みではない。今すぐに重蔵の逃げ先が判明したところで手遅れだろう。それでも、白状させる意味はある。隣の咲川藩か谷沢藩か、それとも遠方か。敵を知らねば百戦が殆ういと考えるべきだ。しかし素破であれば生半可な拷問では口を割らぬだろう。

「牢へ送って、尋問術に長けた者の手にゆだねるべきです」

さつそくにも代官所へ連行したいところだが、女の右足首は赤く腫れており、歩けそうにない。背負子しよいこで担ぐにしても小者は荷物で手一杯だし、下っ端の手代といえども武士の

沽券にかかわる。神崎古流の薫陶を受けた七郎にはそんなこだわりはないのだが、率先して女を担いで部下に侮られてはこれからの仕置が難しくなる。

村人の手を借りようとしたが、太兵衛が難色を示した。代官所へ着くのは夕方。夜に山道を引き返すのは無謀だ。

そんなこんなで、女は物置小屋にでも監禁しておき、翌朝に代官所へ連行する手筈となった。ほんとうに素破となると、村人の見張りだけでは心もとない。七郎とその小者、加えて手代のひとりも村に泊まる仕儀となった。女が樹から降ろされて縄を解かれた。やはり立ってはおれず、脚を投げ出して座り込んだ。太兵衛に命じられて、村人のひとりが女に着物を返しかけたのを。

「配慮は無用」

七郎がとどめた。

「その手の者ならば、縄抜け術を身に着けておるかもしれぬ。素肌への縄掛けがよい」

七郎が縄を手にして女の背後に片膝をついた。後ろへまわさせた手首を十文字に縛って引き上げ、乳房の上下にも縄を掛けた。神崎古流捕縛術の『一本縄女高手小手』。厳しい縄目に見えるが、それほどの圧迫は加えておらず、長時間の緊縛でも鬱血は生じない。ただし、縄抜けを試みて不用意にあがくと、だんだんに縄は締まっていく。七郎は左右に開いた腋に手を差し入れて女を立たせ、縄目の上から着物を着せかけてやった。

村の者たちに物置小屋を片付けさせているあいだにと、七郎が女を気づかう。

「用を足すのなら、今のうちだぞ」

女は無言でかぶりを振るだけだった。

太兵衛配下の二人に抱えさせて物置小屋に女を押し込んだものの。斧や鋤鍬は取り除かれていたが、縄束もあれば棒杭も残っている。縄抜けの小道具がそこらじゅうにあった。

七郎は、座っている女の投げ出した太腿に両手を差し入れて割り開こうとした。

女は渾身の力で抗う。

「無体な……おやめください」

おや？ 七郎は訝しんだ。武家言葉とは、
いよいよこの女、只者ではない。

「悪戯をしようというのではない。おとなしくしておれ」

声はおだやかだが、七郎は女の乳房を片手でつかみ、強い力でねじった。男なら睾丸、女は乳房。急所を押えれば容易に制圧できる。

「きひい……お赦しを」

よほど堪えたのだろう。足首をつかんで左右に開かれても、女は逆らわなかった。

痛めている右足は前へ投げ出させたまま、右の膝と左足首を重ねて縛り合わせた。上体を軽く前へ倒させて首で縄を折り返す。これで女は、完全に動きを封じられた。身体を倒して尺取虫のように動くことすらできない。

七郎は女を置いて小屋を出かけたが、ふと思いなおした。素破のたぐいなら、なんとかして逃げようと隙をうかがうだろうが。武家

言葉が気にかかる。七郎はさらに縄を手にして、大きな結び玉を作った。それを女の口に押し込み、首を巻いて猿轡にした。女は自害の道も封じられたのだった。

三・電光組

野々村たちが村を去り、郡代官所への帰途にあつた頃。七郎の娘の珠代も正恵ともども、ちよつとした騒動に巻き込まれていた。

その日。珠代は供に中間ひとりを連れただけの身軽さで伯父の神崎正安——というよりは、従姉の正恵を訪っていた。稽古ではなく、ただ遊びに来ただけだった。

神崎正恵、●八歳。柴田珠代は●四歳。どちらもひとり子で、珠代は幼い頃から正恵とお姉様と慕ってきたし、正恵も実の妹のようにかわいがっていた。もつとも。珠代が十歳の頃までは、今日はお姉様と魚釣りをしたとか、自分で竹を削ってトンボ作りを教わったとか聞かされて、七郎は娘が自分の姉顔負けの御伝馬に育つのではないかと案じてはいたのだが。神崎正安の訓導があれば間違つた道には進むまいと、それだけは安心もしていた。

今も安心はしているのだが――どの道が間違っているかとなると、人それぞれに考えが異なる。とまでは、七郎の思い及ばないところであつた。

珠代の母は、彼女が三つの夏に腹の子とともに身罷つた。珠代の祖父である柴田弥一郎がそうであつたように、父の七郎も後添えを迎えなかつた。城勤の男親だけで子供を育てるのは難しい。女中に面倒を見てもらったが、神崎の家に数日間を預けることも少なくなつた。珠代の言動が四歳年長の正恵に似てくるのは自然の成り行きだつた。

この日の騒動も、ふたりが並みの娘なら、まったく違った展開となつていただろうし、遠い昔に置き去られた肌風が甦ることもなかつたであらう。

稽古の日はほかの弟子の手前もあるので依怙臆肩と思われぬよう我慢しているが、今日のようなときはかならず、正恵が珠代を城下まで送って行く。親の目も耳も届かぬひと時

とあれば、女二人でも十分に姦しいし、二百石取りの武家の息女ともあろう者が茶屋の軒先で饅頭をばくついたりもする。お供の間は松吉という四十絡みの、若い娘たちから見れば苔むした親爺もいいところであるが、なかなか口が堅い。というか。三日と空けずにお嬢様の供を言いつかれれば、都度の駄賃も馬鹿にならない。すこしくらいの御伝馬は見ぬふり聞こえぬふりで、珠代の不興を買わない分別をはたらかせている。

三人が城下町の木戸口に差し掛かったとき。「む……？」

木戸口の向こうで白刃が閃くのに気づいて、正恵が足を止めた。

見ると、若い侍が女人に斬りつけている。ただ刀を振り回して脅しているだけのようなだが、女人の着物は切り裂かれていた。狼藉者の仲間とおぼしき侍が五人、女人を逃がさぬよう囲んで、なにやら囃し立てている。往来の多い木戸口にもかかわらず、野次馬の姿は

少ない。とばっちりを恐れて身を隠しているのだろう。

正恵は右手で着物の裾を下前ごとつかんで引き上げると、向う脛を蹴り出して走った。

珠代は引き止めるどころか、その後ろ姿を頼もしそうに見守っている。

「おやめなさい！」

正恵が侍たちの十間手前で鋭く叫んだときには、裾をきちんと直している。

「女子を取り籠めて刀を振るうとは、なにごとです」

女の身体すれすれに何度も斬りつけていた男が、宙でぴたっと白刃を止め、その姿勢のまま一瞬で正恵に向きなおった。

(電光組……)

狼藉者たちの正体は、誰の目にも明らかだった。下級家臣団の部屋住(次男以下)を中心とする徒党だ。刀を構えている男は、全身が金色に光っている。というのは目の錯覚で、赤みがかった紗の単衣の上に、黄色い紗の単

衣を重ねて着ている。そこに薄紫の帯を締め
ているものだから、極彩色で目が痛くなりそ
うだった。

異様な風体は、その男にかぎったことでは
ない。着流しの上に胴丸を着けた者、白地に
大きな髑髏を染め抜いた者、服装はまとも
だが、つかい棒でも入れてあるのか一尺
の余も高々と茶筌髷に結っている者。個々
に奇をてらっただけで、言い伝えに聞く江
戸の白柄組のような統一性はない。

「勇ましい娘だと思えば、なるほど、神崎苔
流のじゃじゃ馬か」

白無垢に黒い髑髏の三つ紋を染め抜いた
男が、金色の横に並んだ。

「なにごとかとの問いであったな。座興に
裸踊りなどさせているところだ」

それとも、おまえが踊ってみせるか。髑
髏の男は抜刀すると、大上段にかまえて無
造作に間合いを詰めてきた。

並みの娘なら大慌てで逃げ出すか、魂を

飛ばして腰を抜かすか——いや、そもそも六人の無法者の前に飛び出したりはしていない。

何流と見分けられないほど、男の構えは杜撰だった。

「いやあつ！」

裏返った気合声もろとも男が斬りかかってきたが、わざと刃筋をはずしているのを正恵は見取った。害意はない。しかし、悪ふざけを笑ってやり過ぎす度量は、●八歳の乙女にはなかった。

正恵は右へ体をかわして懐へつけ入り、脇差を奪うなり、がら空きの胴を峰で強打した。

「う、ぐう……」

地面を斬りつけた大刀に寄りかかるようにして、髑髏は崩れ落ちた。

「おっ……」

「うぬう！」

金色侍を除く四人が、ばらばらっと正恵を

取り囲んだ。

(また母上に叱られるかな……)

一瞬、正恵は後悔した。が、すぐに思いをあらためた。無辜の民が危難に遭っている場を見過ごしては、それこそ父母の双方から叱られる。

「まてまれまて」

金色がひどくせわしない口調で仲間を押しとどめた。

「さるらは、ははおや…さまき。しかおれ…
たみや…かわれるかな」

早口なうえに呂律が怪しい。瞬きを繰り返しながら正恵を見つめる視線と、目にも留まらぬ迅さで刀を納めて抜刀の構えになった動作とを合わせて推測すると。

「さすがは、母親ゆずりの剣さばき。しかし、俺の田宮流抜刀術をかわせるかな」と言ったらしい。

昼間から酒に酔っているのかと正恵は怪しんだが、金色侍の顔は赤くない。どころか、

蒼白にちかい。目は血走って、唇の端が片側だけ吊り上っている。あるいは、気が振れているのか。

「お姉様……！」

背後に珠代の叫びを聞いても、正恵は振り返らない。

「さがっていなさい。松吉、珠代を頼みます」

自分を囲む四人をさっと眺めたが、破落戸同然とはいえ武士の端くれ。か弱い娘（実は珠代も、女子組では懐剣術の筆頭なのだが）を人質に取るような動きは見せぬ。

その四人が、囲む輪を大きく広げた。

「山本殿、まかせたぞ」

胴丸の男が金色に声を掛けた。

（やはり、この男が……）

服装から、そうではあろうと正恵も推測していたが。この男が電光組の首領、山本時三郎だった。父親が隠居して長兄が警固組頭を嗣いだ頃から愚劣たというから、我儘末っ子の典型か。警固組という武張った家柄だから、

すこしくらいの乱暴は大目に見てもらえるのも、悪い方向へはたらいっている。

金色山本も、先ほどの黒髑髏とおなじくらい無造作に間合いを詰めてきた。しかし、凄まじい気迫が全身から迸っている。

(かなり、できる……)

酔っ払いようが気が振れていようが、この男の剣術には差し障りがないようだ。抜刀の構えといい足の運びといい、神崎道場の十番札より強い。ちなみに正恵は、すでに述べたように本道場の四十三人中で三番札である。だから、まだ正恵は自信にあふれていた。その自信が驚愕に変じたのは……

あと三步で抜刀の間合——と正恵が見て、右半身はんみに迎撃の構えをとったとき。

「けーっ！」

気合声というよりは怪鳥の叫び。跳躍の起こり（動作の準備）をまったく現わすことなく、山本は一間半を跳びながらまさしく電光の迅さで抜刀し、正恵の斜め前へ左足で着地

するや、右足を大きく踏み込んで身体をひねりざまに斬りつけてきた。

「あっ……」

のけぞるようにして刃先をかわした正恵だったが、乳房の間に鋭い痛みを感じた。後ろへたたらを踏んで、ふたたび脇差を片手正眼に構えたとき。

ばさつと着物がふたつに割れた。

(これでは、あの迅さに……)

山本の動きは人間業とは思えぬほどの迅さだった。一番札の坂倉志郎左でも、おそらく斬られていた。正恵が間一髪でかわせたのは、相手に正恵の身体を斬る意思がなかったからだ。

(悔しい……！)

切り裂かれた着物は動きを妨げる。闘いに没入しかけている正恵に、羞恥の感情は乏しい。相手の目論見に手を貸してやるのは癪だったが、こうなつては是非に及ばず。

正恵は右半身に構えながら、左腕を襦袢も

ろとも袖から抜いた。脇差を持ち替え、左脇構えになって右腕も抜いた。帯まで切られていたので小袖は脱げてしまい、襦袢が裳裾のように腰から下へ垂れた。乳房の谷間に走る赤い線と白い裸身との対比は、まさに一服の危な絵そのものだった。

「自分から裸になりおった」

「山本殿、もうひと太刀頼むぞ」

電光組の面々が囁し立てるが、正恵の耳には届いていない。

（ほかの動きも抜刀術ほどに迅ければ……）

勝てない。そのことしか考えていなかった。

真剣での立ち会いで負けるということは、死を意味する。相手が心底、正恵の着衣を切り裂くことしか意図していないとしても、手許が狂わぬ保証はない。いや。もしも正恵が相手の予測をうわまわって鋭く攻撃すれば、そしてなお正恵が及ばなければ、戯れの刃はその瞬間に必殺の斬撃に変わるだろう。

それでも、正恵は刀を引かなかった。脇差

を放り出して命乞いをすれば、電光組の言いなりに裸踊りのひとつも踊ってみせれば、いくらなんでも白昼の往来。それ以上の狼藉は免れるかも知れぬ。しかし、それでは——正恵は二度と道場に立てなくなる。いや、武家の娘としては喉を突くしかなくなる。

まさに進退窮まったのではあるが。それだけに。

(もしも、わたしにも肌風が使えらしたら……それは、今を措いてない)

絶体絶命の危機に直面して、肌を晒すことでおのれを追い詰め、心の在り様を火事場の馬鹿力と同じような尋常ならざるものとなし、敵の毛筋の先ほどの動きも委細見逃さず未来の刃筋を無意識裡に予測して、肌以太刀風を感じるが如くに斬撃をかわす。母は多くを語ってくれないが、母とともに闘った叔父の柴田七郎が、そのときの様子を微に入り細を穿って、何度も聞かせてくれた。火事場の馬鹿力とか刃筋の予測といった合理的な説明は、

父の正安から教わった。

その肌風の遣い手である母の肉を受け、希代の武術者たる父の血を嗣いだ自分が、ふだんの腕では絶対に勝てぬ敵と対峙して、肌風を出せぬはずがない。そう思ったからこそ、あっさりと半裸になったのだ。

正恵は脇差を両手で握って八双に構えた。神速の袈裟斬りを受けるには、おのれの刀も高く構えるほうがよい。女の片手では斬撃の勢いに押し切られるかもしれぬ。

正恵は万全の態勢で対峙して。

山本はすでに刀を鞘に納めて右手を柄にかけ、腰を低く落とした抜刀の構え。

「やめろお。やめ、やめ、やめろ！」

遠くから呼ばわる声がかきつけになつて。

「けーっ！」

今度も、正恵には抜刀の瞬間が見えなかった。目の前に金色の壁が押し寄せる。正恵が逃げずに身を沈めながら頭上で剣を寝かせたのは、ほとんど無意識の動きだった。

ギヤリン！

刃と刃が噛み合う音。

「あっ……！」

予測をはるかに超えた衝撃に、脇差が跳ね飛ばされた。正恵は死を覚悟した。

しかし、数瞬を待っても斬撃は振ってこなかった。そのかわりに、金色の壁が下へ動いて、真四角の顎と左右がひとつにつながった。太い眉とが目の前に現われた。

「いささか乱暴が過ぎた。許してくれい」

せわしない口調は影をひそめて、横柄ではあるがまともな喋り方になっている。ただ、吐く息がひどく煙草臭い。咳き込みそうになつて息を止めたが、それでも喉の奥がいからつぽかった。

それを除けば。正恵を覗きこむ顔は無骨ではあるが、凶悪な印象はない。人間業とは思えぬ剣を遣っていた男とは別人のように見えた。

正恵が戸惑っているうちに、遠くから呼ば

わった男が二人の間に割ってはいった。

「大道のどまん中で段平を振り回すとは、いくら山本様でも見過ごせません。さいわいに怪我人は出ていないようですが……」

股引を穿いて着物の裾を端折り右手に十手を持つている姿は、ひと目で町方手先（江戸でいうところの目明し）と知れた。

「木端役人の腰巾着が、武士に意見をするつもりか」

毒づきはしたが、素直に刀を納めて。ちゃりんと小判を正恵の前に投げた。

「着物の弁済だ。眼福の愉しみ賃も含めてあるぞ」

木戸口の柱に身を隠して様子をうかがっていた女にも、同じことを言っつて小判を放った。女は小判を拾うなり、切り裂かれた着物を掻き合わせるようにして逃げていった。そんな姿のまま町方手先に根掘り葉掘り訊ねられるのは、誰だつて願ひ下げだろう。

無論、正恵は小判を拾つたりしない。黙つ

て立ち上がると、脱いだ袖に腕を通して、これは逃げた女と同じように、すこしでも肌を隠そうとした。ようやく中間の松吉が駆け寄つてきて、自分の法被を脱いで遠慮がちに正恵に手渡した。

「ありがとう」

正恵が身なりを（どうにもならないなりに精いっぱい）整えているうちにも、電光組の六人は、正恵に気絶させられた男も息を吹き返して、三人ずつが道いっぱいに広がって立ち去りかけている。

「もし、山本様……あまりに無分別が過ぎますと、あつしも同心の旦那に事の次第を申し上げなくちゃなりません。巡りめぐつて、監察御奉行の耳にまで達すれば、ちと厄介なことになるんじゃないかと存じますが」

「拙者は狼藉などはたらいしておらぬ。誰か俺を訴えたとしても言うのか？」

町方手先の意見など歯牙にも掛けず、山本は肩で風を押しつけながら立ち去った。

「わたしは、ここで引き返します」

正恵とても、切り裂かれた着物で町中を歩けない。

「ええと。神崎道場のお嬢様とお見受けします。電光組に絡まれていたようですが、いきさつをお聞かせいただけませんか」

町方手先の矛先が自分に向けられて、正恵はしよっぱい顔をした。なまじ腕に覚えがあるばかりに狼藉者を懲らしめようとして、手も足も出なかったなどと知られては、神崎古流の名を貶める。

「何もありません。それよりも……」

正恵は珠代を町方手先の前へ押し出した。

「この人は、農事方家老御差配の郡代官、柴田七郎様の息女、珠代殿です。間違いのないよう、屋敷まで送ってさしあげなさい」

出汗にしてごめんねと、と目で謝って。正恵は従妹を置き去りにして逃げた。

五万石の小藩にあって、二百石はけして軽い身分ではない。そのご息女を押しつけられ

ては、町方手先としても正恵を追いかけるところではなかった。